錦城高校新聞

題字 井口 文章

再刊 第５０６号

印刷・発行

錦城高等学校新聞委員会
編集室 2025

みんなでつくる
錦城高校新聞

一面：デフスクエアに行って来ました！
錦城生にアンケート 関心度は…？
二面：編集部体験記第二弾！
デフリンピック座談会開催

デフリンピック閉幕しました！

コミュニケーションの多様性を知る

デフリンピックスクエアで感じる奥深さ

東京2025デフリンピックが11月26日（水）に閉会した。これまで錦城高校新聞ではデフリンピック特集を行ってきた(第498号特集・第504号特集)。第3弾はデフリンピック開催中に編集部員が行った試合や関連施設のレポートをお届けする。

（編集部共同取材）

笑顔あふれるコンテンツ

編集部の1年生3人で11月24日（祝）午後、渋谷にある国立オリンピック記念青少年総合センターの「デフリンピックスクエア」に行ってきた。ここは東京2025デフリンピック開催中、様々なコンテンツを誰もが楽しめる入場無料のスペース。選手も道を通り、手を振ると振り返してくれる選手も多くいた。時間の限り、全力で遊んできた。

入ってすぐの「にぎわいエリア」には、デフリンピック関連団体のブース出店などがあり、家族連れから選手までたくさんの国籍の人が訪れていた。私たちが参加させていただいたのは、デフ陸上のバトンパスを体験するというもの。練習で行われる、バトンで相手の腕などを軽く叩いてからのバトンパスを体験。後ろから渡されるため、視覚情報も限られ、より不安感があった。なお本番では決めてある位置に前の選手が走りすぎたところで走るそうだ。

別のエリアではデジタル技術展示・体験の「みるTech（テック）」が開催され、新しい機器の紹介やVR体験ブースがあり、多くの人でにぎわっていた。編集部員たちはQRコードで読み取るとカメラの中でアニメのキャラクターのアイテムをもてる技術に大興奮だった。

デフサッカー体験！

デフフットサルの宗澤麟太郎選手と設楽武秀選手によるワークショップでは、デフサッカーを体験した。音を遮断するヘッドホンをつけ、手話で指示された色の相手にパスをした。実際に体験してみると、手話をすぐに理解できずパスまでに時間がかかり、自分がパスした相手が本当にパスするべき人だったのか不安になった。改めて普段聴覚に頼っていることを実感。音がない世界で素晴らしいプレイをするデフ選手に感動した。

またその後、両選手によるデフリンピック3択クイズが行われた。ろう者が「寝ている間に火事があったとき、どうやって気がつく？」（答えはにおいや光で知らせる）など、知らなかったことを知ることができた。

クイズ後、両選手に取材させていただいた。高校生に伝えたいことを伺うと宗澤選手は「デフアスリートがどのように戦っているのかを見て、何か変わるきっかけを感じてくれたならうれしいです」と話してくれた。設楽選手は「新しい世界に足を踏み入れるイメージで、聴覚障がい者に対するコミュニケーション手段はたくさんあることを、デフリンピックを通して知ってほしいです」とメッセージをくれた。

＊＊＊

デフリンピックスクエアでは紹介しきれない支援企業ブースやNPO活動のコーナーがあった。今回の訪問で、デフリンピック自体だけでなく、様々な技術や世界を知ることができて行動することの大切さを実感した。

クイズ「日本でデフリンピックが初めて開催されたのはいつでしょう？」
答えは第498号特集裏のリードで確認してくださいね！
右：設楽武秀選手、左：宗澤麟太郎選手

スタンプを集めて缶バッジゲット！

デフサッカーを体験する
編集部員

デフリンピックスクエアの「DEAF SPORTS HOUSE（デフスポーツハウス）」というブースでは、デフリンピックやデフスポーツの歴史に関するパネルや日本を代表する漫画などが展示されており、来場者による日本代表への応援が詰まったメッセージが飾られていました。

私たちもデフ日本代表選手に「頑張って下さい！」と応援メッセージを書きました。老若男女問わず、そして国籍も問わず、代表選手に向けて言葉を送る姿が印象的でした。

（梅・桃・綿）

デフリンピックのロゴと記念写真！

観戦した錦城生にインタビュー

当日振り返り「楽しかったー」の声

デフ卓球を考察して

私たち編集部がデフ卓球を観戦していた11月24日（祝）に、同じ会場で試合を観戦していた錦城生がいた。後日、観戦していた有村周子さん（1K）に話を聞いた。

有村さんは、無料で予約なく試合が観戦できること、テレビ東京の「卓球ジャパン！」に今回デフ卓球団体に出場した亀澤選手が出演していたことをきっかけに観戦しに来たそう。

外部のクラブで卓球をしている有村さんは、デフ卓球を見て気が付いたことがあったという。「バックサーブ（体の正面で打つサーブ）が多かったなと思います」。一般的に使われているのは、球を高く上げて、落ちてきた球を打つフォアサーブだ。「視覚に頼っている分、デフ卓球では正面で見やすいバックサーブを使う選手が多いんじゃないかな」と考察。また、スピードよりも回転を重視した打ち方をしている選手が多かったことを教えてくれた。

お気に入りのラケットと一緒にピース！

国籍を超えてハイタッチ！

当日、一日中デフ卓球を観戦していたという有村さん。印象的なシーンについて、準々決勝、カザフスタン対インドの試合を挙げてくれた。有村さんの後ろに座っていたカザフスタンを全力で応援する人につられて、周りの日本人もカザフスタンを応援し始めたというエピソードも教えてくれた。そしてカザフスタンが勝利した瞬間、国籍を超えてみんなでハイタッチをしたことがあったようで、当日を思い出し、「楽しかったー」と微笑んだ。

（桃）

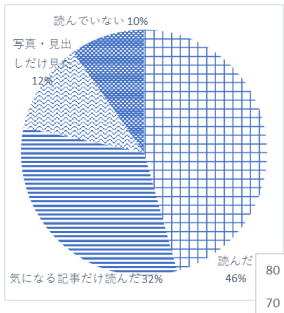
デフリンピック特集を通して

錦城生にアンケート

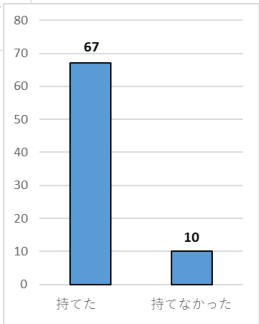
東京2025デフリンピック閉幕後、錦城生にアンケートを実施したところ92名の回答をいただいた。（試験前になってしまい、回答ができなかった方にお詫びいたします）

関心を持ってくれた人多数

錦城高校新聞のデフリンピック特集記事を読んだ、気になる記事だけ読んだと回答してくれた人は約80％だった。記事を通して関心を持てたと回答してくれた人は72.8％だった。拙い記事だったが、選手や関係者の方々の思いが伝われば嬉しい。



←錦城高校新聞のデフリンピック特集を読みましたか？



記事を通して→
デフリンピックに
興味を持ちましたか？

一方、回答92名のうち実際に試合を観戦した錦城生は10名、イベント参加は6名だった。周りの生徒に聞いてみると、土日の試合は部活があって忙しかったり、ニュースなどでもあまり取り上げられてなかったりと、実際に足を運ぶチャンスがなかったという声があがった。

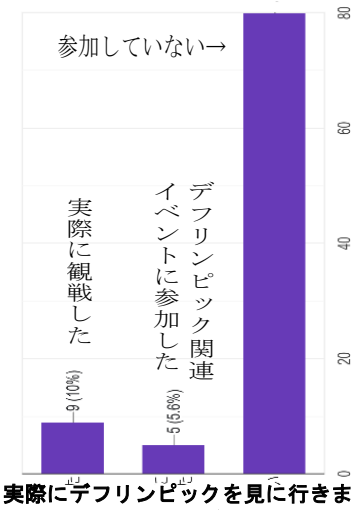
私たちはどう変わったのか？

夏からのデフリンピック取材をする中で、「デフリンピックや手話の世界があることを知ってもらいたい」という話を選手や関係の方々から伺った。そこでアンケートでは「障がいを持つ人達について高校生がより関心を持つために、どのような方法があると思いますか」と聞いた。自由記述のうち、最も多かったのは「もっと関わる機会を増やす」という意見だった。SNSでの交流や講演会、同年代の方の話を聞く、手話や聞こえない人をテーマにした漫画やドラマをみる、車イスの競技や、ブラインドサッカー、ボッチャなどを体育やイベントで体験する、などの意見をあげてもらった。

社会のなかにもっとバリアフリーの施設や設備が広まることや、障がいスポーツ選手がもっと活躍できる場が増えることで関心が高まるという意見もあった。また、障がいを特別に意識することなくみんな違うことが普通である、という意見もあがった。

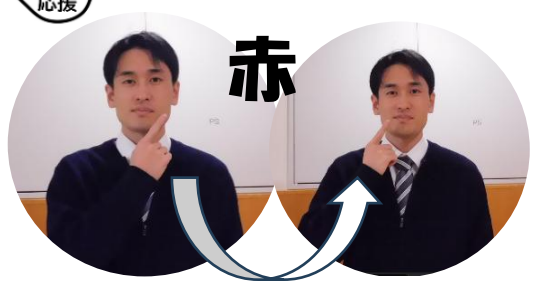
実際に経験してみないとわからないことは多い。東京2025デフリンピックは初の日本開催となり、金メダルラッシュもあり新聞やネットで試合記事は配信されていたが、テレビ中継もなく試合を目にする機会も少なかった。これからも取材を通して、色々な方々の声を伝えていきたい。

アンケートにご回答いただいた皆さんありがとうございました。



実際にデフリンピックを見に行きましたか？もしくは、デフリンピック関連イベントに参加しましたか？（複数回答可）

手話を覚えよう！⑭



赤

青

今回手話を実演してくださったのは、社会科の小高幹陽先生。第14弾で紹介するのは「赤」と「青」だ。「赤」（左の写真）は人差し指の腹を自分に向けて自分から見て左から右に唇をなぞる。「青」（右の写真）は指をそろえた片手で口から耳にかけて頬を撫でる。皆さんはこれがつくテストの点数は取っていませんよね？

手話は簡単に覚えられるのでもっと興味を持ついい機会になりました（小高先生）

手話の世界に飛び込もう

～観戦記②＆座談会＆先生への質問を添えて～

ボウリング　数メートル先のボウラー

23日（日）に東大和グランドボウルにてボウリングの男子団体決勝戦が行われ、編集部員の苺、梅、藤が観戦。会場の外にはたこ焼きや焼きそばなどの食品が並ぶ屋台やダンスなどを行うミニステージがあり、活気づいていた。少し並んだが無事に会場に入ることに成功。まず感じたのは選手との距離感の近さだった。数メートル先には選手がいて、躍動感や緊張感が強く感じられた。天井にはモニターが取り付けてあり、選手の様子や試合のスコアが常に表示され、展開が分かりやすくなっていた。

10フレームを2セット行い、倒したピンの数が多い方が勝ちとなる。決勝戦はドイツ対韓国の試合。両チームともに精度の高い攻防が繰り広げられた。

興味深いと思ったことはチームごとにボールの投げ方やストライクを決めた時の喜び方に違いがあったことだ。韓国チームは深呼吸をして大きく腕を上げてボールを投げ、ストライクを決めると腕を突き出て、仲間とハイタッチ。ドイツチームは手の方に力をかけてボールを投げ、ストライクが決まると声を上げ、ハイタッチしながら足で「ダンッ」と音をたてていたり自国の旗を掲げたりして、大きく喜びを分かちあっていた。長くも一瞬だった2セットが終わり、その両方をドイツが制し2対0で優勝となった。デフリンピックにしかない「ボウリング」という種目の魅力に気がつくことができた。（苺）

会場においてあった「YY レセプション」。その場で音声を、日本語と英語の２言語にして表示してくれるもの。編集部員も体験させていただいた。

陸上　ランプを使ってスタート

23日（日）午後、駒沢オリンピック公園陸上競技場にてデフリンピックの男子４×１００ｍリレー予選が行われた。日本チームが登場し行われたこの試合を編集部員の紬と椿が観戦。

スタート合図には通常の号砲に加え、光で知らせる「スタートランプ」が使われる。このランプはピストルと連動し、赤・黄・緑の順に点灯することで、選手にスタート合図を伝える。また、この予選ではフライングの場面もあったが、選手たちはレーンの外周に設置されたランプの点滅によってフライングを知り、全員がすぐにスタート地点へ戻っていった。音に頼らず、視覚情報だけで即座に判断できるような工夫を感じることができた。

全力で楽しんできた編集部員。フォトスポットでキャラクターとハイチーズ！

日本チームは第一走者の力強い飛び出しから流れをつかみ、バトンを確実に繋いで順位を上げていった。観客席では、手話での応援が広がった。最終的に日本は2位で予選を突破し、決勝への進出を決めた。

競技後編集部の紬は、「デフ競技を見るのは初めてでしたが、静かだからこそ選手の緊張感が伝わりました。観客席での手話の応援も温かくて、新しい応援の形を知れた気がします」と語った。この予選を通じてデフ陸上が速さを競うだけの場ではないということが分かった。光で知らせるスタート、手話応援から生まれる一体感。一般の陸上にはない魅力が詰まっており、観る側にも新しい気づきを与えてくれる競技だった。（紬）

水泳　水の音が響く会場で

デフリンピック水泳女子50メートルに出場した吉田選手

24日(祝)に東京アクアティクスセンターにて水泳の大会が開催され、編集部員の水と蒲が観戦。会場は想像よりもずっと静かで音楽や水の音が響いているだけ。それでも、自作の応援用の旗やタオルを掲げている人がたくさんおり、暖かな雰囲気に包まれていた。各国の応援する方々が、自国の選手を懸命に応援し、どのような結果でも称えていた。

会場に訪れていた親子は日の丸が描かれた画用紙を持って応援していた。話を聞くと、デフリンピックはインターネットやテレビを通じて知ったのだという。どの選手も全力で、時々大声も出しながら応援していた。選手の中でも、男子200メートル個人メドレーなどで金メダルを獲得した茨隆太郎さんを特に二人は応援しているそうで、お母さんは「頑張っている姿は応援したくなるよね」と話してくれた。

さらに当日は、デフリンピック初出場の水泳女子50メートルバタフライの吉田琉那選手に取材をすることができた。生まれた時から耳が聞こえなかった吉田選手。水泳は5歳から始めて、小学生の時にデフリンピック選手を見て憧れを持ち、自分もそうなりたいと思ったのだという。今回は惜しくも予選敗退となってしまったが「楽しく泳ぐことができてよかったです」と振り返ってくれた。競技で苦労することは、スタートの合図が分かりづらいこと。デフリンピックでは、スタートの合図にはランプが使われている。しかし一般の大会ではそれがなく苦労しているそうだ。今回の取材を通して改めて選手たちのまっすぐな気持ちを知ることができ、応援したいという気持ちが強まった。（水）

卓球　新たな推しをみつけて全力応援！

24日（祝）に東京体育館にて、卓球6日目（最終日）が開催され、編集部員の桃、梅と綿が観戦。最終日は女子・男子団体の試合が行われた。会場外はのぼりが立ち、指文字のキーホルダーづくりなどいくつかのブースが並んでおり、多くの子どもが楽しんでいる様子が。荷物検査を終え会場に入ると、目下に20もの卓球コートが広がる。中央上には大きな画面で団体女子決勝リーグを中継。聴覚障がい者でも楽しめるように、漫画調の文字で「カッ」「カコーン」などその場の卓球の打つ音が、得点が入ると拍手の手話のマークが表示された。

わくわく！　いざ試合会場へ！

私たちは団体女子の決勝リーグ日本対ポーランドと団体男子準決勝日本対中華台北を応援。3セット先取を1ゲームとして、3ゲーム先に勝利した方の勝ちだ。選手の荒い息遣い、球が跳ねる音、床を踏む音がまじまじと聞こえ、臨場感があった。日本チームが得点を入れるたびに観客たちは笑顔で手話の拍手（両手をパーにしてキラキラさせる）をしていた。私たちもサインエールで必死に日本チームを応援。夏に取材した亀澤史憲選手がコートに立つと、部員の綿は推しに向けて、一層熱を入れて「大丈夫勝っ！」「いけ！」とサインエールを送った。試合は負けてしまったが、日本男子団体は表彰台で銅メダルに輝いた。女子団体はポーランドにストレート勝ちし、対中国の試合は負けてしまったが銀メダルを獲得した。

会場では同時に複数の試合が行われていて、私たちの向かいの席で選手を「エアヴィン！エアヴィン！」と全力応援して得点に一喜一憂するオーストラリア応援団の姿がかわいらしく、私も思わず「エアヴィン！がんばれー」と応援していた。母語は違えど、そして聞こえる・聞こえないに関係なく一つになって、同じ時間を過ごし楽しむことができて、大満足だ。（桃）

先生に質問「デフリンピック見ましたか」

夏からデフリンピック開催に合わせて連載している「手話を覚えよう！」。参加していただいた先生方に、いくつか質問をした。

桐ケ谷先生

Qデフリンピックを見た？
Aあんまり見ていないですね。でも、新聞を通して開催することを知れました。
Q先生の思う共生社会とは？
Aそれぞれの「この障がいがあるから〇〇」、「これだから〇〇」とか押し付け合わない。
Q手話を使った？
A知り合いの趣味に関する手話について、どんな手話なんだろうってほかの先生と調べたことはあります。

榎本先生

Qデフリンピックを見た？
Aネットニュースで見たけど、がっつり見てはいないな。
Q手話日常で使った？
A正直、手話企画以降使ってないなぁ。ジェスチャーを使って会話したことはある。

神田先生

Qデフリンピックを見た？
A試合は見ていないけれど、ニュースは見たよ。
Q先生の思う共生社会とは？
A言葉や国籍が違っても、一人一人が他者の権利があることを理解すること。

小向先生

Qデフリンピックを見た？
Aネットニュースで山田真樹選手の記事は読んだ。目が見えているのだから普通に走れるのでは？と思っていたけど、スタートとかは特に音に頼っているんだなって、気づくきっかけになったよ。
Q手話を日常で使った？
A使ってないかな。「先生〇〇の手話してましたね」っていう会話を職員室でしてたよ。

新聞座談会

デフリンピックの特集に関わってきた編集部員（桃・梅・菊・綿）で実際に行ったデフリンピック関連の取材を踏まえて振り返ってみた。

「手話」の面白さと奥深さ

会話は手話だけではなく

桃　前に神田先生が「一度言語として手話を学んだことがある」って言っていたじゃん。聞いた時は、手話が学ぶほどの言語なのかなと正直思っていて。でも、バナナが日本はむいて食べるから日本手話ではむく動作。海外は切って食べるから国際手話では切る動作っていうことを、今回の取材を通して知ることができたよ。文化によって違うのが面白いくて、もっと知りたいなと思ったよ。

梅　私が思ったのは、手話は付属語がないし、ですますもない。だから疑問は顔とか文脈で判断しないといけないのが面白いなぁって。あと、ボディタッチが多いかも。音で伝えられない分、ボディタッチなどで補おうとしているのかなぁ。

菊　日本語は初対面の人と会うとき、敬語とか使うことが多い。いい文化だけど、壁を感じることもある。「ですます」もないから、心の距離の近さにつながっているのかも。

楽しい思い出を話しながら

桃　英語に、そういう面で似ているね。私は手話を知って、他の言語と比べていくうちに、日本語をもっと好きになったよ。

梅　手話って、みんなのよく使うジェスチャーに近いと思うよ。

菊　ジェスチャーは、相手によりわかりやすく伝えようとする過程でてくるものだよね。手話も、相手に伝えたいという思いは共通している。伝え方は重要じゃなくて、相手を想って、わかりやすく伝えようとする姿勢が大切なんだろうなと思ったよ。

デフリンピックを通して私たちは

これからどうしていく？

桃　卓球のデフリンピック会場では声＋手話の応援が多かった。想像していたよりも、静かではなかったな。

綿　ニュースも少なくて、調べてもあまり出てこなかったな。もっと大々的にやるべきだったと思う。

梅　オリンピックは自分のやっている競技という理由で見る人も多い。でもデフリンピックはちょっとルール違うから「近さ」がないのかも。

菊　オリンピックは学校で「知ろう」みたいな時間があったけど、デフリンピックはその時間が全くなかった。

梅　知っているものの中で私たちは好き嫌いをつくるって探究講演会で知ったけれども、デフリンピックもそうだよね。知る機会ない人が多いのかなと思った。

菊　でもちょっとずつ浸透しているのかもよ。

梅　会場に、人もたくさんいたしね。

桃　最後に、これからどうしていきたい？

綿　取材で見たデフ選手の姿を通して、伝えようとすることの大切さを学んだよ。難しいけど、人見知りしていないで、挑戦していかないといけないと思った。

菊　のほほんと生きていたら関わらなかった、自分の知らないデフリンピックの世界に飛び込みたいと思った。

梅　手話部に所属していた私にとっては身近な話題だった。次は、他の知らないことを知りたい。例えば視覚障がいについてとか。

＊＊＊

デフリンピックを通して、自分の生きている世界だけではない世界に触れ、その違いを知ることができた。これからは、自分以外の世界にいる人を思って、生きていきたいと強く思った。

座談会で話題に出たので、試しに梅が桃につかまり、目をつぶって小平ロードを下校、見えない世界を少しだけ体感した。何度かコケて、壁にもぶつかりそうになった。見えているときは無意識に障害物を避けていると気がついた。階段の段数がわからないとそれだけで危険だ。段差は怖いけど、ないと危険なところがわからないから必要でもある。知らない道だったり一緒に歩いてくれる人がいなかったりしたら、今の私はおそらくどこにもいけない。ただ、歩いているあいだ周りの音や気配がいつもよりもわかった。見えない世界は普段気づかないことに気づける世界だ。聞こえない世界、見えない世界で生きる人たちに寄り添って、歩いていきたい。（梅）

見えない世界を体験